

生徒指導の質的改善に関する実証的研究 —高校生の攻撃性について—

朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司
小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典

はじめに

文部科学省の生徒指導関係略年表による昭和 24 年から平成 16 年までの、主として高等学校の生徒指導等に関する事項は以下の通りである。

昭和 25 年の高校進学率は 43%である。同 26 年、少年非行が第 1 のピークを迎えた。同 29 年、覚せい剤の第 1 次乱用期を迎えた。

昭和 30 年の高校進学率は 52%、35 年には 58%、36 年には 60%を超えた。

昭和 38 年には生徒による非行増加に伴い、「青少年非行防止に関する学校と警察との連携の強化について」通知された。昭和 39 年には、少年非行が第 2 のピークとなり、青少年の不良化が増加したため、生徒指導研究推進校（高等学校 8 校）が設置された。また生徒指導を専門的に担当する教師の養成のために生徒指導主事講座を開催した。さらには生徒指導の充実強化を図るために生徒指導講座を開催した。

昭和 40 年の高校進学率は 71%であった。生徒指導資料第 1 集「生徒指導の手引き」が作成され、中・高等学校に配布された。昭和 41 年には、不登校（学校嫌い）の調査が開始された。昭和 43 年には、高等学校生徒指導連絡協議会が開催された。昭和 44 年には高校生の反体制運動が拡大したため、「高等学校における政治的教養と政治的活動について」通知された。

昭和 45 年の高校進学率は 82%であった。改訂された高等学校学習指導要領に「生徒指導の充実」が明記された。昭和 49 年には遊び型非行の増加や暴走族の増加、対教師暴力増加が社会問題となった。

昭和 50 年には高校進学率が 92%となる一方で、登校拒否者が 1 万人を超えた。また中学校・高等学校に「生徒指導主事」が省令主任として制度化された。

昭和 55 年の高校進学率が 94%と増加する一方で、校内暴力の頻発や登校拒否の増加、さらには家庭内暴力の増加が起こった。昭和 56 年には「生徒の校内暴力等非行の防止について」を通知し、校内暴力についての手引書（生徒指導資料第 17 集「生徒の健全育成をめぐる諸問題—校内暴力問題を中心に—」）を作成した。昭和 57 年には登校拒否が 2 万人を超え、生徒間暴力も増大した。そのため、中央および地方で「生徒指導推進会議」を開催し、教育委員会、学校、PTA、関係機関等による協議が実施された。昭和 58 年は少年非行の第 3 のピークとなった。また登校拒否に関する手引書（生徒指導資料第 18 集、生徒指導研究資料第 12 集「生徒の健全育成をめぐる諸問題：登校拒否問題を中心に」）が作成された。

さらには教育相談活動推進事業が実施された。昭和 59 年にはいじめ事件が増加し、登校拒否も 3 万人を超えた。

昭和 60 年の高校進学率は 94%であった。いじめ事件の増加により、児童生徒の問題行動に関する検討会議が「いじめ問題の解決のための緊急アピール」を提言した。また関係省庁から成る非行防止対策推進連絡会議「最近における「いじめ」等青少年の問題行動に関し当面とるべき措置について」の申し合わせを行った。そしてこのような緊急提言を受けて、「児童生徒のいじめ問題に関する指導の充実について」の通知や、「いじめの問題に関する指導の徹底について」通知し、「いじめの問題に関する指導状況等に関する調査結果について」通知した。昭和 61 年にはいじめによる自殺の増加がみられる。昭和 63 年には登校拒否が 4 万人を超え、いじめ、登校拒否問題の深刻な中学校に教員の加配措置を講ずるといった制度改正がとられた。

平成元年の高校進学率は 95%で、登校拒否や高校中退問題について検討するための学校不適応対策調査研究協力者会議が設置され、学校不適応対策推進事業が開始された。平成 2 年には学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否問題について」の中間まとめを公表するとともに、登校拒否児の適応指導教室事業が開始された。また神戸高塚高校女子生徒死亡事件を契機に、校則の見直し状況についての調査を実施している。平成 3 年には高校生の非行が増加するなかで、校則見直し状況調査結果が公表された。平成 4 年には登校拒否が 7 万人を超えるなかで、「登校拒否問題への対応について」の通知された。また学校不適応対策調査研究協力者会議が「高等学校中途退学問題について」報告した。

平成 5 年の高校進学率は 96%になった。「高等学校中途退学問題への対応について」通知された。平成 6 年にはいじめによる自殺事件・自殺が増加するなかで、「いじめ対策緊急会議」が緊急アピールし、「いじめの問題について当面緊急に対応すべき点について」通知した。平成 7 年には登校拒否が 8 万人を超えた。また「いじめの問題の解決のために当面取るべき方策等について」の通知や、「いじめの問題への取り組みの徹底等について」の通知され、スクールカウンセラーの配置が開始された。平成 8 年には児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議が「いじめの問題に関する総合的な取組について」提言し、「いじめの問題に関する総合的な取組について」通知され、いじめ問題等対策研修講座が実施された。平成 9 年には不登校児童生徒が 10 万人を超えた。また少年非行が凶悪・粗暴化した。

平成 10 年の高校進学率は 97%である。中学生等の殺傷事件を契機に、「児童生徒の問題行動への対応のための校内体制の整備等について」通知され、「心の教室相談員」の配置が開始された。またいじめ・不登校等研修講座が実施された。平成 11 年には不登校児童生徒が 13 万人を超えた。平成 12 年には、17 歳の犯罪が問題化され、また携帯電話が普及している。平成 13 年には池田小学校児童殺害事件が起こり、「少年の問題行動等への対応のための総合的な取組の推進について」通知された。

平成 15 年には高校進学率が 97%となるなかで、不登校問題に関する調査研究協力者会議が「今後の不登校への対応の在り方について」報告し、「児童生徒の問題行動等への対応の

在り方に関する点検について」や「不登校への対応のあり方について」通知された。また長崎県幼児殺害事件や平成16年の大阪府岸和田事件，さらには長崎県佐世保市女子児童殺害事件から，「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」が策定され，「子どもと親の相談員の配置」が開始された。また「生徒指導上の諸課題に対する指導者の養成を目的とした研修」及び「体験活動の円滑な実施を促進するための指導者の養成を目的とした研修」が開始された。

以上のように，主として高等学校における生徒指導上の問題を概観した。その中でも特に，高校進学率が90%を超えた昭和55年頃から，登校拒否や高校中退といった学校不適應の問題，校内暴力の頻発，生徒間暴力の増大やいじめの問題が起こり，今日まで続いている。

以上のような問題行動の多くは青少年の攻撃性の高まりによるとも考えられる。したがって，高校生の生徒指導における質的改善が必要となる。そこで，われわれは質的改善を図るためには高校生の攻撃性の実態を知ることが必要と考え，そのために高校生の攻撃性を身体的攻撃，言語的攻撃，短気および敵意の4特性から検討した（朝長ら，2008）。そして男子生徒の攻撃性は3学年ともに身体的攻撃が最も大であること，すなわち男子生徒では暴力的反応傾向や暴力への衝動，暴力の正当化が強いことがわかった。女子生徒では3学年ともに敵意が最も大であること，すなわち女子生徒は他者に対して猜疑心や不信感が強い傾向があるという結果を得た。

以上のような結果を，長崎市内の高校生から得た。そこで，本研究では長崎市外の高校生の攻撃性を身体的攻撃，言語的攻撃，短気および敵意の4特性から検討することを目的とした。

方 法

(1) 回答者

長崎市外の3高等学校の生徒1919名（男子927名，女子992名）であった。1年生は677名（男子320名，女子357名），2年生は630名（男子308名，女子322名），3年生は612名（男子299名，女子313名）であった。

(2) 調査

調査は，日本版 Buss—Perry 攻撃性質問紙（BAQ）を用いて行った。

本質問紙は攻撃性の情動的側面で，怒りの喚起されやすさを測定する尺度である「短気」，認知的側面で，他者に対する否定的な信念・態度を測定する尺度である「敵意」，行動的側面で，身体的な攻撃反応を測定する尺度である「身体的攻撃」と言語的な攻撃反応を測定する尺度である「言語的攻撃」の4特性を測定する下位尺度から構成されている。質問項目は24項目で，回答者は各質問に対して「非常によくあてはまる」，「だいたいあてはまる」，「どちらともいえない」，「あまりあてはまらない」，「まったくあてはまらない」の5段階の1つに回答した。

結 果

結果の処理については、以下のように行った。

各質問項目に対して「非常によくあてはまる」に5点、「だいたいあてはまる」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「まったくあてはまらない」に1点を加算し、その合計点を各回答者の4特性の代表値とした。

判定基準に関しては、安藤ら（1999）のBAQの平均点と標準偏差をもとにして作成し、各回答者の4特性の代表値にあてはめた。

統計処理に関しては、各回答者の4特性の代表値からt-検定を行い、以下のような結果を得た。

(1) 男子生徒における攻撃性

1) 全学年の攻撃性

身体的攻撃	: $\bar{x} = 18.765$	SD = 4.972	判定 : 普通
言語的攻撃	: $\bar{x} = 15.229$	SD = 3.409	判定 : 普通
短気	: $\bar{x} = 13.667$	SD = 4.058	判定 : 普通
敵意	: $\bar{x} = 18.134$	SD = 4.086	判定 : 普通
① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較	t = 17.860	(p < .01) d f = 1852	
② 身体的攻撃と短気の比較	t = 24.188	(p < .01) d f = 1852	
③ 身体的攻撃と敵意の比較	t = 2.986	(p < .01) d f = 1852	
④ 言語的攻撃と短気の比較	t = 8.974	(p < .01) d f = 1852	
⑤ 言語的攻撃と敵意の比較	t = 16.622	(p < .01) d f = 1852	
⑥ 短気と敵意の比較	t = 23.620	(p < .01) d f = 1852	

以上の結果のように、高校生男子の攻撃性に関しては、身体的攻撃が最も大で、次に敵意が大であった。また身体的攻撃と他の3特性との間に統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

2) 1年生の攻撃性

身体的攻撃	: $\bar{x} = 18.906$	SD = 5.015	判定 : 普通
言語的攻撃	: $\bar{x} = 14.809$	SD = 3.438	判定 : 普通
短気	: $\bar{x} = 13.428$	SD = 4.231	判定 : 普通
敵意	: $\bar{x} = 18.425$	SD = 4.228	判定 : 普通
① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較	t = 12.053	(p < .01) d f = 638	
② 身体的攻撃と短気の比較	t = 14.935	(p < .01) d f = 638	
③ 身体的攻撃と敵意の比較	t = 1.312	有意差なし	
④ 言語的攻撃と短気の比較	t = 4.532	(p < .01) d f = 638	
⑤ 言語的攻撃と敵意の比較	t = 11.869	(p < .01) d f = 638	
⑥ 短気と敵意の比較	t = 14.944	(p < .01) d f = 638	

以上の結果のように、1年生男子の攻撃性に関しては、身体的攻撃が最も大で、次が敵

意であった。また身体的攻撃と敵意との間には有意な差はなかったが、身体的攻撃と他の2特性との間には統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

3) 2年生の攻撃性

身体的攻撃	: $\bar{x} = 18.279$	SD = 4.774	判定: 普通
言語的攻撃	: $\bar{x} = 15.490$	SD = 3.285	判定: 普通
短気	: $\bar{x} = 13.675$	SD = 3.705	判定: 普通
敵意	: $\bar{x} = 17.929$	SD = 3.863	判定: 普通

- ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較 $t = 8.446$ ($p < .01$) $d f = 614$
- ② 身体的攻撃と短気の比較 $t = 13.370$ ($p < .01$) $d f = 614$
- ③ 身体的攻撃と敵意の比較 $t = 1.002$ 有意差なし
- ④ 言語的攻撃と短気の比較 $t = 6.433$ ($p < .01$) $d f = 614$
- ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較 $t = 8.439$ ($p < .01$) $d f = 614$
- ⑥ 短気と敵意の比較 $t = 13.947$ ($p < .01$) $d f = 614$

以上の結果のように、2年生男子の攻撃性に関しては、身体的攻撃が最も大で、次に敵意が大であった。また身体的攻撃と敵意との間には統計的に有意な差はなかったが、身体的攻撃と他の2特性との間には統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

4) 3年生の攻撃性

身体的攻撃	: $\bar{x} = 19.114$	SD = 5.100	判定: 普通
言語的攻撃	: $\bar{x} = 15.408$	SD = 3.471	判定: 普通
短気	: $\bar{x} = 13.913$	SD = 4.212	判定: 普通
敵意	: $\bar{x} = 18.033$	SD = 4.150	判定: 普通

- ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較 $t = 10.386$ ($p < .01$) $d f = 596$
- ② 身体的攻撃と短気の比較 $t = 13.596$ ($p < .01$) $d f = 596$
- ③ 身体的攻撃と敵意の比較 $t = 2.841$ ($p < .01$) $d f = 596$
- ④ 言語的攻撃と短気の比較 $t = 4.737$ ($p < .01$) $d f = 596$
- ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較 $t = 8.391$ ($p < .01$) $d f = 596$
- ⑥ 短気と敵意の比較 $t = 12.051$ ($p < .01$) $d f = 596$

以上の結果のように、3年生男子の攻撃性に関しては、身体的攻撃が最も大で、次に敵意が大であった。また身体的攻撃と他の3特性との間に統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

(2) 女子生徒における攻撃性

1) 全学年の攻撃性

身体的攻撃	: $\bar{x} = 16.452$	SD = 4.495	判定: 普通
言語的攻撃	: $\bar{x} = 14.843$	SD = 3.386	判定: 普通

短気 : $\bar{x} = 14.388$ SD = 3.825 判定 : 普通
 敵意 : $\bar{x} = 17.798$ SD = 4.067 判定 : 普通

- ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較 t = 9.005 (p < .01) d f = 1982
- ② 身体的攻撃と短気の比較 t = 11.012 (p < .01) d f = 1982
- ③ 身体的攻撃と敵意の比較 t = 6.998 (p < .01) d f = 1982
- ④ 言語的攻撃と短気の比較 t = 2.803 (p < .01) d f = 1982
- ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較 t = 17.591 (p < .01) d f = 1982
- ⑥ 短気と敵意の比較 t = 19.238 (p < .01) d f = 1982

以上の結果のように、高校生女子の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、身体的攻撃が次に大であった。また敵意と他の3特性との間には統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

2) 1年生の攻撃性

身体的攻撃 : $\bar{x} = 16.546$ SD = 4.443 判定 : 普通
 言語的攻撃 : $\bar{x} = 14.849$ SD = 3.373 判定 : 普通
 短気 : $\bar{x} = 14.521$ SD = 3.830 判定 : 普通
 敵意 : $\bar{x} = 18.078$ SD = 4.062 判定 : 普通

- ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較 t = 5.750 (p < .01) d f = 712
- ② 身体的攻撃と短気の比較 t = 6.523 (p < .01) d f = 712
- ③ 身体的攻撃と敵意の比較 t = 4.809 (p < .01) d f = 712
- ④ 言語的攻撃と短気の比較 t = 1.213 有意差なし
- ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較 t = 11.558 (p < .01) d f = 712
- ⑥ 短気と敵意の比較 t = 12.039 (p < .01) d f = 712

以上の結果のように、1年生女子の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、身体的攻撃が次に大であった。また敵意と他の3特性との間には統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

3) 2年生の攻撃性

身体的攻撃 : $\bar{x} = 16.012$ SD = 4.298 判定 : 普通
 言語的攻撃 : $\bar{x} = 14.994$ SD = 3.266 判定 : 普通
 短気 : $\bar{x} = 14.130$ SD = 3.758 判定 : 普通
 敵意 : $\bar{x} = 17.643$ SD = 3.772 判定 : 普通

- ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較 t = 3.386 (p < .01) d f = 642
- ② 身体的攻撃と短気の比較 t = 5.915 (p < .01) d f = 642
- ③ 身体的攻撃と敵意の比較 t = 5.116 (p < .01) d f = 642
- ④ 言語的攻撃と短気の比較 t = 3.111 (p < .01) d f = 642
- ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較 t = 9.527 (p < .01) d f = 642
- ⑥ 短気と敵意の比較 t = 11.836 (p < .01) d f = 642

以上の結果のように、2年生女子の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、身体的攻撃が次に大であった。また敵意と他の3特性との間には統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

4) 3年生の攻撃性

身体的攻撃： $\bar{x} = 16.796$ $SD = 4.723$ 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x} = 14.681$ $SD = 3.522$ 判定：普通

短気 ： $\bar{x} = 14.502$ $SD = 3.885$ 判定：普通

敵意 ： $\bar{x} = 17.639$ $SD = 4.352$ 判定：普通

- ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較 $t = 6.351$ ($p < .01$) $df = 624$
- ② 身体的攻撃と短気の比較 $t = 6.636$ ($p < .01$) $df = 624$
- ③ 身体的攻撃と敵意の比較 $t = 2.323$ ($p < .05$) $df = 624$
- ④ 言語的攻撃と短気の比較 $t = .604$ 有意差なし
- ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較 $t = 9.349$ ($p < .01$) $df = 624$
- ⑥ 短気と敵意の比較 $t = 9.515$ ($p < .01$) $df = 624$

以上の結果のように、3年生女子の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、身体的攻撃が次に大であった。また敵意と他の3特性との間には統計的に有意な差があった。判定基準に関しては、4特性ともに普通であった。

(3) 性差

1) 身体的攻撃

① 1年生： $t = 6.493$ ($p < .01$) $df = 675$

② 2年生： $t = 6.268$ ($p < .01$) $df = 628$

③ 3年生： $t = 5.837$ ($p < .01$) $df = 610$

以上のように、身体的攻撃に関しては1, 2, 3年生ともに男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。

2) 言語的攻撃

① 1年生： $t = .150$ 有意差なし

② 2年生： $t = 1.902$ 有意差なし

③ 3年生： $t = 2.573$ ($p < .05$) $df = 610$

以上のように、1年生では女子の方が大であったが、統計的には有意な差はなかった。2年生では男子の方が大であったが、統計的には有意な差はなかった。また3年生においても男子の方が大で、統計的にも有意な差があった。

3) 短気

① 1年生： $t = 3.527$ ($p < .01$) $df = 675$

② 2年生： $t = 1.530$ 有意差なし

③ 3年生： $t = 1.798$ 有意差なし

以上のように、1, 2, 3年生ともに女子の方が大で、1年生においては統計的にも有意

な差があったが、2, 3年生においては有意な差はなかった。

4) 敵意

① 1年生: $t = 1.087$ 有意差なし

② 2年生: $t = .939$ 有意差なし

③ 3年生: $t = 1.147$ 有意差なし

以上のように、1, 2, 3年生ともに男子の方が大であったが、統計的には有意な差はなかった。

考 察

本研究の目的は、長崎市外の高校生の攻撃性を身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から検討することであった。

(1) 男子生徒の攻撃性

男子生徒全体の攻撃性の傾向は、身体的攻撃が最も大で、次が敵意で、言語的攻撃、短気の順になっており、身体的攻撃と他の3特性の間には統計的に有意な差があった。身体的攻撃は攻撃性の行動的側面で、身体的な攻撃反応を測定する尺度である。すなわち暴力反応傾向、暴力への衝動、暴力の正当化を測定する尺度である。したがって男子高校生の攻撃性は、暴力反応傾向、暴力への衝動、暴力の正当性を強くもった攻撃性といえる。

判定基準の「やや強い」と「非常に強い」を「強い攻撃性」とした場合、「強い身体的攻撃」の割合は23% (25%)、「強い敵意」は20% (17%)、「強い言語的攻撃」は18% (16%)、「強い短気」は12% (12%)であった。

攻撃性の4特性のうち、「強い攻撃性」を1つでも有している場合を「1要因型」としたとき、47% (46%)の男子生徒が1要因型であった。また4特性のすべてが「強い攻撃性」の場合を「4要因型」としたとき、1% (1%)の男子生徒が4要因型であった。

以上の結果は、朝長ら(2008)の得た結果とも同様の傾向を示したものといえる。すなわち、長崎市内の男子生徒も市外の男子生徒も同じような傾向の攻撃性を有しているといえる。

1年生の攻撃性の傾向は、身体的攻撃が最も大で、順に敵意、言語的攻撃、短気であった。身体的攻撃と敵意との間には有意な差はなかったが、身体的攻撃および敵意と他の2特性との間には有意な差があった。「強い身体的攻撃」の割合は24% (21%)、「強い敵意」は24% (14%)、「強い言語的攻撃」は15% (17%)、「強い短気」は12% (11%)であった。1要因型は50% (43%)、4要因型は2% (1%)であった。

以上のことから、市外の1年生男子の攻撃性は市内の高校生に比べると、敵意が強いこと、すなわち他者に対する猜疑心や不信感が強い傾向にあることがわかった。

2年生の攻撃性の傾向は、身体的攻撃が最も大で、順に敵意、言語的攻撃、短気であった。身体的攻撃と敵意との間には有意な差はなかったが、身体的攻撃および敵意と他の2特性との間には有意な差があった。「強い身体的攻撃」の割合は19% (26%)、「強い敵意」

は 18% (20%), 「強い言語的攻撃」は 19% (16%), 「強い短気」は 9% (11%) であった。1 要因型は 43%, 4 要因型は 0.3% であった。

以上のことから、市外の 2 年生男子の攻撃性は市内の高校生に比べると、言語的攻撃がやや強いことを除くと、3 特性ともに減少していること、また 1 年生と比較すると、言語的攻撃を除けば 3 特性ともに減少していることがわかった。したがって、2 年生男子の特徴は自己主張や議論好きの傾向の高まりが考えられた。

3 年生の攻撃性の傾向は、身体的攻撃が最も大で、順に敵意、言語的攻撃、短気で、身体的攻撃と他の 3 特性の間には統計的に有意な差があった。「強い身体的攻撃」の割合は 26% (26%), 「強い敵意」は 19% (16%), 「強い言語的攻撃」は 19% (16%), 「強い短気」は 14% (15%) であった。1 要因型は 48% (47%), 4 要因型は 2% (1%) であった。

以上のことから、市外の 3 年生男子生徒の攻撃性は市内の高校生に比べると、敵意と言語的攻撃に関してやや大きいと考えられる。また身体的攻撃に関しては 2 年生で減少したものの、3 年生になるとまた増大したこと、さらには短気が増大したことがわかった。すなわち、短気は怒りっぽさや怒りの抑制の弱さを測定する尺度で、攻撃性の情動的側面であることから、3 年生の攻撃性は怒りの喚起の高まりが考えられる。

(2) 女子生徒の攻撃性

女子生徒全体の攻撃性の傾向は、敵意が最も大で、順に身体的攻撃、言語的攻撃、短気で、敵意と他の 3 特性の間には統計的に有意な差があった。敵意は攻撃性の認知的側面で、他者に対する否定的な信念・態度を測定する尺度である。すなわち、他者からの悪意や軽視など猜疑心や不信感を測定する尺度である。したがって、女子高校生は他者に対する猜疑心や不信感が強いといえるだろう。「強い敵意」は 24% (21%), 「強い身体的攻撃」は 18% (18%), 「強い言語的攻撃」は 13% (13%), 「強い短気」は 15% (14%) であった。1 要因型は 45% (43%), 4 要因型は 1% (1%) であった。

以上の結果は、朝長ら (2008) の得た結果とも同様の傾向を示したものといえるが、敵意に関してはやや大きくなったと考えられる。すなわち、長崎市内の女子生徒は市外の生徒に比べると、やや敵意が高い、すなわち他者に対する猜疑心や不信感がやや強いと考えられる。

1 年生の攻撃性の傾向は、敵意が最も大で、順に身体的攻撃、言語的攻撃、短気で、敵意と他の 3 特性の間には統計的に有意な差があった。「強い敵意」は 26% (17%), 「強い身体的攻撃」は 18% (16%), 「強い言語的攻撃」は 13% (12%), 「強い短気」は 17% (14%) であった。1 要因型は 53% (39%), 4 要因型は 0.3% (1%) であった。

以上のことから、市外の 1 年生女子生徒の攻撃性は市内の生徒に比べると、全体的に高い攻撃性を有していると考えられた。

2 年生の攻撃性の傾向は、敵意が最も大で、順に身体的攻撃、言語的攻撃、短気で、敵意と他の 3 特性の間には統計的に有意な差があった。「強い敵意」は 23% (26%), 「強い身

体的攻撃」は15% (22%), 「強い言語的攻撃」は13% (14%), 「強い短気」は12% (14%)であった。1要因型は34% (49%), 4要因型は0.6% (2%)であった。

以上のことから、市外の2年生女子生徒の攻撃性は市内の生徒に比べると、全体的に低い攻撃性を有しており、また1年生と比べても低い攻撃性であるといえる。

3年生の攻撃性の傾向は、敵意が最も大で、順に身体的攻撃、言語的攻撃、短気で、敵意と他の3特性の間には統計的に有意な差があった。「強い敵意」は23% (22%), 「強い身体的攻撃」は22% (15%), 「強い言語的攻撃」は13% (14%), 「強い短気」は16% (12%)であった。1要因型は47% (40%), 4要因型は1% (0.4%)であった。

以上のことから、市外の3年生女子生徒の攻撃性は市内の生徒に比べると、全体的に高い攻撃性を有しているが、2年生と比べると身体的攻撃と短気に高まりがみられた。このことから、3年生女子の攻撃性は怒りの抑制が弱く、暴力への衝動や暴力の正当化が高まるといえる。

(3) 性差

1) 身体的攻撃

身体的攻撃は攻撃性の行動的側面で、暴力反応傾向や暴力への衝動および暴力の正当化を測定する尺度である。

1年生においては、男子の方が大で、統計的にも有意であった。また「強い身体的攻撃」の割合は男子が24% (21%)で、女子は18% (16%)であった。2年生においては、男子の方が大で、統計的にも有意であった。また「強い身体的攻撃」の割合は男子が19% (26%)で、女子は15% (22%)であった。3年生においては、男子の方が大で、統計的にも有意であった。また「強い身体的攻撃」の割合は男子が26% (26%)で、女子は22% (15%)であった。

以上のことから、強い身体的攻撃に関しては男子生徒の方が女子よりも高いこと、また2年生が他の学年よりも低いこと、さらには市内の男子の方が高いことなどがわかった。

2) 言語的攻撃

言語的攻撃は攻撃性の行動的側面であり、言語的な攻撃反応を測定し、自己主張や議論好きなどを測定する尺度である。

1年生においては、女子の方が大であったが、統計的に有意な差はなかった。「強い言語的攻撃」の割合は男子が15% (17%)で、女子は13% (12%)であった。2年生においては、男子の方が大であったが、統計的に有意な差はなかった。「強い言語的攻撃」の割合は男子が19% (16%)で、女子は13% (14%)であった。3年生においては、男子の方が大で、統計的にも有意な差があった。「強い言語的攻撃」の割合は男子が19% (16%)で、女子は13% (14%)であった。

以上のことから、強い言語的攻撃に関しては男子生徒の方が女子よりも強いこと、また男子においては1年生が2年生や3年生に比べると低いこと、それに対して女子では学年間でほとんど変わらないことがわかった。

3) 短気

短気は攻撃性の情動的側面で、怒りっぽさや怒りの抑制の弱さを測定する尺度である。

1年生においては、女子の方が大で、統計的にも有意な差があった。「強い短気」の割合は男子が12%（11%）で、女子は17%（14%）であった。2年生においては、女子の方が大であったが、統計的に有意な差はなかった。「強い短気」の割合は男子が9%（11%）で、女子は12%（14%）であった。3年生においては、女子の方が大であったが、統計的に有意な差はなかった。「強い短気」の割合は男子が14%（15%）で、女子は16%（12%）であった。

以上のことから、強い短気に関しては女子生徒の方が男子よりも強いこと、また男女ともに2年生では低く3年生では高くなっていることがわかった。

4) 敵意

敵意は攻撃性の認知的側面で、他者に対する否定的な信念・態度を測定し、他者からの悪意や軽視など猜疑心や不信感を測定する尺度である。

1年生においては、男子の方が大であったが、統計的にも有意な差はなかった。「強い敵意」の割合は男子が24%（14%）で、女子は26%（17%）であった。2年生においては、男子の方が大であったが、統計的にも有意な差はなかった。「強い敵意」の割合は男子が18%（20%）で、女子は23%（26%）であった。3年生においては、男子の方が大であったが、統計的にも有意な差はなかった。「強い敵意」の割合は男子が19%（16%）で、女子は23%（22%）であった。

以上のことから、強い敵意に関しては女子の方が男子よりも強いこと、また1年生が他の学年よりも強いこと、さらには1年生と3年生では市外の生徒の方が市内の生徒よりも強いことなどがわかった。

要 約

本研究では、長崎市外の高校生の攻撃性を身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から検討することを目的とし、以下のような結果を得た。

(1) 男子生徒の攻撃性

1) 全学年の攻撃性

- ① 身体的攻撃が最も大で、他の3特性との間に統計的にも有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い身体的攻撃」の割合が23%で、最も大であった。
- ③ 1要因型は47%で、4要因型は1%であった。

2) 1年生

- ① 身体的攻撃が最も大で、敵意との間には統計的にも有意な差はなかったが、他の2特性との間には有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い身体的攻撃」と「強い敵意」の割合が最も大で、24%であった。
- ③ 1要因型は50%で、4要因型は2%であった。

3) 2年生

- ① 身体的攻撃が最も大で、敵意との間には統計的に有意な差はなかったが、他の2特性との間には有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い身体的攻撃」と「強い言語的攻撃」が19%で、「強い敵意」は18%、「強い短気」は9%であった。
- ③ 1要因型は43%で、4要因型は0.3%であった。

4) 3年生

- ① 身体的攻撃が最も大で、他の3特性との間に統計的に有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い身体的攻撃」の割合が26%で、最も大であった。
- ③ 1要因型は48%で、4要因型は2%であった。

(2) 女子生徒の攻撃性

1) 全学年の攻撃性

- ① 敵意が最も大で、他の3特性との間に統計的に有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い敵意」が最も大で、24%であった。
- ③ 1要因型は45%で、4要因型は1%であった。

2) 1年生

- ① 敵意が最も大で、他の3特性との間に統計的に有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い敵意」が最も大で、26%であった。
- ③ 1要因型は53%で、4要因型は0.3%であった。

3) 2年生

- ① 敵意が最も大で、他の3特性との間に統計的に有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い敵意」が最も大で、23%であった。
- ③ 1要因型は34%で、4要因型は0.6%であった。

4) 3年生

- ① 敵意が最も大で、他の3特性との間に統計的に有意な差があった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い敵意」が23%、「強い身体的攻撃」が22%、「強い短気」が16%、「強い言語的攻撃」が13%であった。
- ③ 1要因型は47%で、4要因型は1%であった。

(3) 性差

- ① 身体的攻撃に関しては1, 2, 3年生ともに男子生徒の方が大で、統計的にも有意であった。
- ② 言語的攻撃に関しては、1年生では女子の方が大であったが、統計的には有意な差はなかった。2年生では男子の方が大であったが、有意な差はなかった。3年生では男子の方が大で、有意な差があった。
- ③ 短気に関しては1, 2, 3年生ともに女子の方が大で、1年生においては有意な差があったが、2, 3年生においては差はなかった。

- ④ 敵意に関しては1, 2, 3年生ともに男子の方が大であったが, 有意な差はなかった。

参 考 文 献

- 市村操一 (2004) 怒りのコントロール ブレーン社
- 神田信彦・酒井久美代・杉山成 (2005) なぜ攻撃してしまうのか ブレーン社
- 木野和代 (2000) 日本人の怒りの表出方法とその対人影響 心理学研究, 70, No. 6, 494-502.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・嶋田洋徳 (1998) 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (1) 日本心理学会第62回大会発表論文集, 930.
- 嶋田洋徳・神村栄一・宇津木成介・安藤明人 (1998) 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (2) 日本心理学会第62回大会発表論文集, 931.
- 島井哲志・山崎勝之 (2002) 攻撃性の行動科学—健康編 ナカニシヤ出版
- 曾我祥子・嶋田洋徳 (2001) 中学生の攻撃性と性格特性 日本心理学会第65回大会発表論文集, 533.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2006) 中学生の攻撃性に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 5, 183-200.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2007) 中学生における攻撃性の傾向に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 6, 1-13.
- 朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2008) 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善—高校生の攻撃性について 長崎大学教育学部紀要, 72, 37-48.
- 山崎勝之 (2002) 攻撃性の行動科学—発達・教育編 ナカニシヤ出版